

実りのある

「交流」を

目指して

学習指導要領には、「書くこと」「読むこと」に「交流」という学習過程が示されています。本特集では、その「交流」に焦点を当てます。どんなことを意図し、何に気をつけて指導をすればよいか、授業のイメージがもてるよう、高木まさき先生と梶田萬理子先生にそれぞれご提言をいただき、そして、三つの実践事例をご紹介します。

一人では気づけなかったことに気づく

横浜国立大学 教授 高木まさき

自分の考えがもてるように

—新しい学習指導要領では、「書くこと」に「交流」「読むこと」に「自分の考えの形成及び『交流』という学習過程が明示されました。このように交流が位置づけられるようになったことには、どのような背景があるのでしょうか。

高木 直接的には、PISAの調査結果、それを受けた全国学力・学習状況調査の結果があると考えられます。日本の子どもたちは、海外に比べて、自分の考えを書くことが苦手であるという傾向がはつきりしてきました。それで、「書いて終わり」「読んで終わり」ではなく、自分がどう考えるかを教室の中で伝え合うことが求められるようになったのだと思います。

考えてみれば、自分の考えの交流というのは、本来、自然な行為なんですよね。例えば、文章を書いたら、「何を書いたのかな」と読み合っているのは普通のこと。読むこ

とにしても、同じ文章を読んだら、どう思ったか尋ね合うのは、日常生活で当たり前に行われていることだと思います。もしかすると、戦後の読解中心の国語の授業では断ち切られていたことなのかもしれません。そんな状況のなか、PISAなどに後押しをされて、自然なあり方に立ち戻ったのではないかと私は解釈しています。

書いたら読み合う、読んだら考えを伝え合うという経験を重ねること、「自分の考えをもつ」ということが身につくはずで。と同時に、やり取りのなかで友達の考えを聞くことによって、新たな自分の考えが引き出されることもあると思うんです。友達が、違った視点から違った見方をしていたり、違った視点から同じような考えをもっていたりということがあてはまるでしょう。それに気づくことで生まれる新たな発見もあります。また、「自分とは違うことを考える人間もいるんだな」という、もう一段外から見た気づきをもつ子どももいるかも

しれません。

一人では気づけなかったことに気づく、友達の新たな一面を知る——そう考えると、同じ教室で、違った価値観、ものの見方・考え方をもつ子どもたちが、それぞれの考えを交流するのは、大きな意味があるように思えます。

あるいは、「学力の向上」ととらえることもできるかもしれませんが。書いたものや読んで思ったことをやり取りすることで、子どもたちは書くことや読むことをおもしろいと思うようになるはずです。それは、結果的に学力向上にもつながっていくといえるでしょう。

他者の視点を入れながら書く

—「書くこと」における交流という「書き方」について助言し合うということが、まず思い浮かびます。

高木 国語科ですから、書き方に注目する

ことはとても大事です。でも、日常の言語生活を考えるとどうでしょう。普通、文章を読むときには、どんな情報が盛り込まれているのかなどといった「内容」に目がいきますよね。そういう自然さは失ってはいけないと思うんです。ですから、内容についての助言や意見だってあつていいでしょう。

私が思うのは、内容をうまく伝えるためには、結局、きちんとした書き方が求められるということです。内容と書き方は、密接に結び付いたものだから。例えば、内容について意見されたときに、「自分はそんなこと書いたつもりはないのに」と思うことがあるでしょう。それはきっと、書き方に問題があつて、読み手に内容が伝わっていないからなんです。内容について議論すると、最終的には書き方の問題になっていきます。ですから、どちらも切り離しては考えられません。ただ、授業のしかたとしては、分けて考えたり、どちらかに重きを置いたりして交流するのがよいかもしれませんね。

学習指導要領解説には、中学年で「推敲して書き終えた文章だけではなく、学習計画や、取材、構成の段階のメモなど書くこととの学習過程についても発表し合うように工夫する」とあります。その意図について

なく考えを述べるのは難しいので、ノートやワークシートに書かせてから発表させるなど、段階を踏むよう手立てを工夫したいものです。

何より重要なのは、子どもたちの考えを発表させるだけで終わるのではなく、それを教師が意味づけたり整理したりし、子どもたちが確認できるようにするということです。そうすることで初めて、子どもたちは、出てきた考えのどこが違うのか、なぜ違うのかということを考えることができるんだと思うんです。そこで考えたことは、次の学習へと結び付いていきます。教師は、その交流を通して、子どもたちに何を考えさせたいのか、何に気づかせたいのかを明確にイメージしてから授業に臨むようにできると思いますね。

「話すこと・聞くこと」の役割

—「話すこと・聞くこと」には「交流」という学習過程はありません。

高木 「話すこと・聞くこと」というのは、それ自体が交流の学習だといえます。話題設定・取材、話す、聞く、話し合う、すべてに交流の要素が含まれています。その意味で、文言としてはありませんが、学習の

語るのに、まず、「プロセス・アプローチ」(※)という方法に触れたいと思います。これは、アメリカで一般的になっている方法で、作文の作成過程のなかで積極的に他者との交流をさせるといふものです。記述をする前に、集めた材料をどう並べるか友達と話し合つて考えるなど、日本でも実践されていますね。

こういうことがアメリカでなされている背景には、「論理的であるために重要なのは、完全で正確な表現かどうかではなく、分かりやすく納得できる表現かどうかだ」という考え方があります。つまり、論理的であるためには、相手の思考の流れに沿つて伝える必要があり、そこでは相手との「対話」が不可欠であるということです。相手に応じて、伝え方の型を工夫するわけです。そう考えると、書くことの過程で、他者の目を入れて「これで伝わるかな」とやり取りすることは、論理的に伝えるという点で重要なことなんです。具体的には、書いたものを交換して読み合つたり、教師が選んだものをいくつか取り上げて、クラス全体で確認し合つたりという学習活動などが考えられますね。

過程において、当然、考えを交流する場面が入ってきます。

あるいは、「話すこと・聞くこと」の学習を積み重ねることで、「書くこと」「読むこと」での交流がより豊かになるという考え方もできるでしょう。「自分の考えを安心して言える」空間ができていることが、考えを交流するときにはとても重要になってきます。これは、学級経営と密接に関わる部分でもあります。が、「話すこと・聞くこと」の学習の目的や効果でもあるんです。「話すこと・聞くこと」の学習を通して、そういう確かな空間を作っておく必要があるでしょうね。また、話し合うなかで、友達の考えを否定するような発言や話し方をする子が出てくることも考えられます。必ず根拠とともに考えを言うとか、よくないところだけでなくよいところも言うようにするとか、そのあたりは発達段階に応じた配慮を欠かさないようにしたいですね。

さらに、話し方・聞き方の技術的な側面——論点を整理して話す、前の人の考えに関係つけて話すなど——での土台作りも、「話すこと・聞くこと」は担っているといえます。ただ、話し方・聞き方をしっかりと押さえていても、それだけでは「書くこと」「読むこと」での交流はうまくいきません。

みんなが読むことの意味

—「読むこと」においても、「自分の考えをもつこと」に主眼が置かれることになるのでしょうか。

高木 そうですね。自分の考えをもつことと、それから、その考えを広げたり深めたりすることを大事にしたいですね。

例えば、「ごんぎつね」を読んだときに、多くの子は「ごん」は死んでしまったと思うでしょうけれども、死んでいないと思う子もいるかもしれません。では、なぜそう思うのかをクラスで話し合うことが、「読み」の深まりにつながるのではないのでしょうか。そして、そういう経験を通して気づいた、自分と友達との読み方や解釈の違いが、自分の「読み方」の選択肢を増やすことにもなっていくはずですよ。また、自分と友達との違いに気づくというのは、他者理解にも通じます。「みんなが読む」ということの意味は、こういう点にもあるのかもしれませんね。

「読むこと」においても「書くこと」同様、マッピングで考えを整理するとか、表現だけに着目して読むとか、自分の考えをもつまでの過程における交流も想定できるでしょう。指導の際には、なんの準備も

「書くこと」の交流では「書くこと」の学習内容・観点が、「読むこと」の交流では「読むこと」の学習内容・観点がはつきりしていないと、話し合いがかみ合わない。その場で思いついたことを言い合うのでは、考えが深まるはずはありませんよね。教える側は、その交流で押さえたい観点をきちんともち、話し合いがそこに向かっていくように手立てを考えるような心がけたいものです。

高木まさき

静岡県生まれ。中央教育審議会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。「ことばと学びをひらく会」会長。著書に「他者」を発見する国語の授業(大修館書店)、『合科的・総合的な学習のための読書関連単元100のプラン集』(共編著 東洋館出版社)など。光村図書の小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。



※プロセス・アプローチ
過程を重視した作文指導のこと。書くまでのプロセスを直線的にたどるのではなく、その一部を何度も繰り返しながら、自分の文章を練り上げていく方法。